

アートの拡大と美術教育の理念 —美術教育実践の更新とその基礎理論をめぐって—

谷口 幹也

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2018年11月1日受付、2018年12月10日受理)

要 旨

本論では、現代における拡大されたアートの概念と美術教育の更新について論じている。ポスト近代以後のアートの展開は、束縛から解放された多様な声、多文化の現実を私たちに示している。本論では、ダントーによる「芸術の終焉」、ボイスによる「拡張された芸術概念」に着目し、レッジョ・エミリア・アプローチ、ティム・ロリンズとK.O.S、ココルーム、せんだいメディアテークの営為から、「拡張された芸術概念」と日本の戦後民間美術教育運動の主張が繋がっていることを論じている。今日の「アートする」ということの動態、在り方を抽出することによって、美術教育学は、日本の公教育の一教科の問題としてではなく、私たちの社会が孕む問題に対して、広く希求する言葉と教育実践を示すことができると結論づけている。

はじめに

今日、アートの現場では、多くの日本人が慣れ親しんだ絵画、彫刻、デザインといったカテゴリーでは把握しきれない多様な表現方法を駆使した作品に出会うことができる。鑑賞者が作品の一部になったり⁽¹⁾、ドキュメンタリー映画のような作品、プロジェクション・マッピングを駆使した作品⁽²⁾など多種多様である。学校教育における美術教育実践をより豊かなものへと更新していくために、今日のアートの拡大と美術教育実践を架橋する言説が、現在、求められている。では、アートの動きに対応する美術教育の新たな理念・内容・方法は、いまだのように生まれつつあるのか。そこで本稿では、現代におけるアートの拡大と美術教育の更新について論じたい。そして美術教育の核を形成してきた言説の変貌のありようを整理し、アートと教育を結びつける哲学的な言説の現在における状況や役割、これからの美術教育実践を更新するための基礎理論のあり方を模索する。

Ⅰ モダンアートの終焉とアートの拡大

ここで、今日のアートの発展に大きく寄与した二人の人物とその主張について整理し、論究の出発点を明らかにする。アーサー・C・ダントー (Arthur. C. Danto 1924-2013) は、

今日のアートの多様な展開、多元的世界を理解する上で極めて重要な著書、『芸術の終焉のあと：現代芸術と歴史の境界』⁽³⁾において、ヘーゲル的な歴史観に基づき、精神の成長の物語＝「近代芸術（モダンアート）」の終焉を論じている。ヘーゲルの『精神現象学』（1807）に見られる歴史観は「教養小説」のうちに典型的に認められる「物語」の構造を有する。モダンアートは、今日では巨匠とされるアーティスト達による芸術の本性と本質についての大規模な探求のナラティブ＝物語であり、「教養小説」が主人公の「自己認識」をその「頂点」としつつその終わりを迎えるように、自己の定義ないし本質を哲学的に探求した20世紀の芸術は、1960年代に芸術としての「任務」を果たし、それゆえに「終焉」した、とダントーは主張する。そして、ダントーは、グリーンバーグ（Clement Greenberg 1904-1994）が指摘するモダニズムの中にある、「純粋性」、「教条主義」、「不寛容」を指摘し、それと対立させる形で、1960年代のポップ・アート、アンディー・ウォーホル（Andy Warhol 1928-1987）の『ブリロ・ボックス』に、「純粋性」とは全く異質な「芸術の本性への哲学的問い」へ見出し、20世紀の芸術、アートの新たな扉を開いた⁽⁴⁾。

「芸術が終焉」したあと、何が始まり、現代へと繋がるのか。ダントーの論考は非常に重要であり刺激的である。それは、モダンアートの終焉を告げるとともに、多様な表現が生まれ、多元的な世界に、現在、私たちが生きていることを示すものであった。ダントーは、今日、アート作品がこうあらねばならないという特別な型、「われわれが固定できるようなスタイルがないという感覚、それに適合しないものはなにもないという感覚をわれわれはもちつづけることになるだろう。しかし実際には、これこそがモダニズムの終焉以後の視覚芸術がもつ特徴なのである」⁽⁵⁾と、述べるのである。

そして、アートの拡大を論じる際、最重要の人物がヨーゼフ・ボイス（Joseph Beuys 1921-1986）である。ボイスは、「社会彫刻」という概念を通して、あらゆる人間は自らの創造性によって社会の幸福に寄与し、誰でも未来に向けて社会を彫刻しうると呼びかけた。そこでの「芸術」とは、芸術史から出てきたような芸術の観念——彫刻、建築、絵画、音楽、舞踊、詩など——ではなく、それを超えた「拡張された芸術概念」である、と提示した。目に見えない本質を、具体的な姿へと育て、ものの見方、知覚の形式をさらに新しく発展・展開させていくこと、そこから彫刻的な形態を物理的な材料としてだけでなく、心的な材料として考え〈社会彫刻〉を構想し実践したのである⁽⁶⁾。

ダントーによる「芸術の終焉」、ボイスによる「拡張された芸術概念」は現代では誰もが表現者になりうること、特別な技術や資格、型は必要ないという点で符合し響きあう。そして現代のアートと社会が持つ可能性、そこに生きる我々の可能性を鼓舞する。

II アートの動きに対応する教育の新たな場

I 拡大するアートに出会う場

今日の「アート」は、マイノリティ、ジェンダーなど抑圧された意識の格闘の場、奪われた言葉と精神を発露する場になり、パブリック・アート、リレーショナル・アート、コミュニティ・アートなど、さまざまなアートの実践が展開されている。具体的にアメリカのニューヨーク近代美術館では、ダントーによって終焉を宣告されたモダンアートにおける歴史的な作品群を展示すると同時に、常に世界の新たなアートの展示が試みられる。ニューヨーク近代美術館の別館であるMoMA PSI⁽⁷⁾では、多様な背景を持つアーティストが長期間滞在し、作品を制作し、多数の市民や来場者等と関わりを持っている。このような取り組みは世界各地の美術館を中心としたアートの現場にて実施されている。つまり現代の美術館は、拡大されたアート、拡張された芸術概念の実践の場となっているのである⁽⁸⁾。

現代アートは、現代社会のさまざまな側面を究極的な表現で切り取り、アーティストは常に新しい表現を求めている。そして私たちは、アートを体験することを通して、多様な表現に出会い、異なる価値観や考え方を認めて生きていくことの大切さを知る。それは他者理解と寛容さが求められる現代の重要な教育実践であり、モダンアートが終焉し、今日のアートの拡大によってもたらされた美術教育学にとって最重要な場面でもあるといえる。アーティストが切り開いたものと出会い対峙する、その体験の意味は教育的視点から検討されるべき重要なテーマである。アートの拡大を踏まえると、このような取り組みは、美術館教育という範疇のみでは語りきれない教育的、美学的な課題を有していることが明らかになる⁽⁹⁾。

2 社会を動かすアートの新たな潮流

近年、アートの新しい潮流として注目されている「ソーシャリー・エンゲイジド・アート (SEA)」は、現実社会に積極的に関わり、人びととの対話や協働のプロセスを通じて、何らかの社会変革 (ソーシャル・チェンジ) をもたらそうとするアーティストの活動の総称である⁽¹⁰⁾。その表現は、「参加」「対話」「行為」に重点を置き、美術史はもちろん、教育理論、社会学、言語学、エスノグラフィーなど、さまざまな分野の知見を活用しながらプロジェクトを組み立て、コミュニティと深く関わり、社会変革を目指すものである。このムーブメントは、アートの拡大と拡張された芸術概念がもたらした今日的展開であると言える。現在、多くのアーティストが様々な立場、役割を持つ人々と協力し社会変革を目指している。

また現在、幼児教育におけるアートの役割が大きく評価されていることも指摘しておきたい。世界各国で注目されているレッジョ・エミリア・アプローチの中心にあるのはアートである。幼児教育の場においてその日何を行うのか、何に取り組むのかは子ども自身が主体的に決定する。子どもたちに対する支援の在り方は、環境を整え、活動を記録し、そして対話をする。子ども自身が絵具や粘土といった古いメディアから、スキャナーやPC、電子回路、プロジェクターといった新しいメディアを駆使し、子ども一人ひとりが「新しい言葉」

を獲得することが目指される。そしてその手法は、地域の連帯をつくり、コミュニティーの新たな可能性を切り開くものとして注目されている⁽¹¹⁾。

3 他者に寄り添い、再生を促す人々

アメリカで現代教育とアートの関係について研究しているニコラス・ペーリー (Nicholas Paley) は、『キッズ・サバイバル』にて、アメリカ東海岸で起きたティーンエージャーたちの芸術的・教育的なプロジェクトを紹介している⁽¹²⁾。その一つであるニューヨークにおける「ティム・ロリンズとキッズ・オブ・サバイバル (K.O.S)」では、ニューヨークのスラム街で、経済的困窮にある子どもたちが文学作品を読み、協働制作するアートプロジェクトを展開している。ペーリーは、こうした子どもたちの「もがきながら創作する力」の意味を問う。子どもたちのまなざしを尊重しながらさまざまな角度から光を当て、新時代の自己表現、アートと社会、教育方法、リテラシー、マイノリティ、アイデンティティ、ジェンダーなどの今日的な在り方を探るのである。そしてペーリーは、社会の様々なアクションの根にあるものが繋がっていることについて、ドゥルーズとガタリに倣いリゾーム＝地下茎に注目すべきであると提起する⁽¹³⁾。

日本においては、NPO法人「こえとことばとこころの部屋」＝「ココルーム」は、大阪市西成区の日本最大の寄せ場「釜ヶ崎」(通称)の商店街の一角で小さなインフォショップ・カフェとメディアセンターを運営し、寄り添いのない人たち、高齢者、生活困窮者に寄り添い、人が繋がる場、人間の尊厳を確認する場を作っている⁽¹⁴⁾。詩の朗読や、紙芝居の制作とその実演などといった、芸術の初源的もいえる活動が印象的である。また、2011年の東日本大震災後、宮城県仙台市の「せんだいメディアテーク」は、多種多様な支援を行い、震災と暮らしにまつわる市民の記憶をアーカイブする取り組みを実施し、ワークショップ、エデュケーションプログラム、展覧会を多面的に展開し地域社会にとって大きな役割を果たしている⁽¹⁵⁾。

これらの活動は、アート作品を展示し、アートの価値を伝達することを目的とするのではなく、弱者に寄り添い、共に作り、人が持つ本来の力を再生していくことが目指されている。人々が出会い、一人ひとりの変容を促す場を継続している。そしてそれらは、ボイスが提示した「拡張された芸術概念」の実践であり、「社会彫刻」の実践であるといえよう。

III 美術教育の核を形成してきた言説の変貌

ここで、美術教育の核を形成してきた言説は、どのようなものだったかを考えてみたい。筆者は、柴田和豊(1978-)に倣い、美術教育の核を形成する思想の根源には、人間に対する「危機」の意識と荒廃した世界からの再生の意志、「希望の原理」が存在していると考え⁽¹⁶⁾。今日の美術教育の源流にあたる19世紀末から20世紀初頭にかけての新教育運動、ロマン主義思想には、近代化していく世界とその大きな渦の中ですり減らされ劣化していく

人間への危機感が大きく存在した。そして、今日の美術教育にとって、最も大きな影響を与えたハーバート・リードによる『芸術による教育』（1943）にも同様の、危機に対する意識と人間再生への強い意志を見出すことができる。

第二次世界大戦後の日本において、長く議論の中心にあったのが創造美育運動＝創美である。創美の基本理念である創造主義は、久保貞次郎が欧米と日本の児童画の比較研究から得た知見をもとに、ホーマー・レイン、フランツ・チゼック、北川民次らの思想や実践に学び、構築した我が国独自の児童中心主義の美術教育である⁽¹⁷⁾。その主要な方向は、美術を介在させることによって内面的な成長を促そうとする「芸術による教育」へと展開していくものであった。1950年代、「創美」の創造主義と「新しい絵の会」の認識主義の二つの主張による論争が展開された。創造主義は、人間性があふれる社会の実現は、人間の内的世界を抑圧することなく、その本性に則っての成長を可能とする教育を獲得できるかにかかっていると、その批判者である認識主義の運動家は、創美の心理主義を攻撃し、社会的な視点こそ必要だと主張した⁽¹⁸⁾。今日の美術教育を考える上でこの論争から見出せることは、そのどちらもが理想主義であったこと、そしてコインの裏表の関係にある主義主張の対立であったといえる。日本においては、高度経済成長を経ることによって「戦後」の終焉が意識され、子どもの貧困、それによって奪われた自由といった克服されるべき「危機」の時代は終焉したと考えられた。それによって創造主義と認識主義による論争は日本の美術教育の背景へと後退する。そして美術教育の主たる議論が、学習指導要領に基づく教科の内容や方法といった課題に推移し、アートの諸形式、色と形といったモダンアートのエレメントに基づく教科内容の整備へとその力点は移動する。また、学習指導要領が明確化される中で、「遊び」の学習的な機能が注目され、「図画工作科」においては「造形遊び」が整備される。特に1980年代においては、「遊び」に関する探求が進められた。この経緯は、日本の美術教育において大きな転回点であり、今日の美術教育の基礎となっている。

しかし、「戦後」と「危機」は終わったのだろうか。失われた自由、過酷な日常といった問題は解決したのだろうか。

西洋哲学の場においては、これらの問題は、20世紀を通じて議論されてきたものであり、現在もなお議論され続けている。現代社会において私たちは、解決しない多くの矛盾、問題を抱えている。そして一人ひとりの人間が、経済的なことでは解決できない問題、アイデンティティや基本的人権、個人の尊厳が脅かされ侵犯されうるといった問題に、誰もが隣接しその境界に存在しているといえる。ハイデガーの実存哲学、ブロッホの「希望の原理」、ボルノーによる「出会い」の研究は、「危機の時代」に関する重要な論究であった。そして、本稿で検討している「アートの拡大」に引きつけて述べるならば、ボイスの「拡張された芸術概念」、「社会彫刻」といった理念は、ドイツ・ロマン主義、シュタイナー (Rudolf Steiner 1861-1925) の思想を源泉としていることから美術教育学上の大きなテーマであ

ることがわかる。そして、20世紀初頭のドイツにおける芸術教育運動、第二次世界大戦後のドイツにおける芸術学、美学の反省とその後の展開と関連づけることが可能である。また、ダントーによる「芸術の終焉」は、近代がポスト近代に推移し、アートの世界が大きく変貌し、抑圧されてきた意識、奪われた言葉が浮上し、精神の発露としてアートが新たな時代を迎えたことを明示している。それらは、日本の美術教育が失念していた「危機」の意識を思い起こす機能をアートが持っていることを認識させるのである。

IV 今後、美術教育の理念に関わる言説が生まれる道筋と理論的場

今後の美術教育の理念を考える上で、今日の20世紀後半以降、拡大したアートに関する知見、理念の探求が必要となる。それは、アートという人類共通のプラットフォームのもとで、社会全体で一人ひとりの創造性と可能性をどのように育むのかという問題にとりくむために必要となる。拡大するアート、拡張する芸術概念をどう捉えることができるのか。この問いは、今後の日本の美術教育学の理論探求において重要な課題となる。

1 拡大するアートを見据える

人間学的なまなざしから美術教育学を構想した美学者の山本正男（1912-2007）は、「美術する」ことに見出す人間の主体的な活動と、教育する活動そのものの中に、同一普遍的論理構造をとらえること、そして人間の主体的・内面的な論理構造において、美術と人間形成とを同時に展開する視座を問う必要があると述べていた⁽¹⁹⁾。そして、「美術する」ことにおいて、人間存在のあらわな生命力動性、本質構造が自覚されるということ、人間の本質を反省し捉える努力であることを指摘した。「美術する」、言うならば動詞として「美術」を捉え直すことを山本は提起したのである。ここで拡大されたアートと、今日の教育の現場を架橋するために「美術する」ことの現在形を明らかにすることの必要性が浮上する。

筆者は「美術する」という文言を、より多くの意味を付与するために「アートする」という言葉と置き換えることを提案したい⁽²⁰⁾。「アートする」こととは、「芸術の終焉」「拡張された芸術概念」を踏まえ、多義的なものとなる。それは「絵を描く」「木を彫る」といった作品制作を意味するのではなく、我々の行動の全ての内側に「アート」の萌芽を抱えていることを意味する。このことによって、より多面的に「表現する」ということの可能性と「人間形成」の意味を探求することが可能となる。

日本の美術教育は、世界及び社会状況を鑑み、アートの拡大を積極的に捉えることが必要となる。今後の美術教育の理念に関わる言説は、「アートする」ことの多面性を探求し、哲学、社会学、ジェンダー論、文化研究、倫理学等の多様な学問、知識体系を横断し論究することが必要になるだろう。また、私たちは、人間形成に関わる「アートする」ことの機能への問いを、現代の美術様式の分化の実態と美術教育理論の多様化の関係を整理し、これを秩序づける基礎論として美術教育学に結実する役目を担っていく必要がある。

2 希望の原理に出会いなおす

また、拡大したアート、拡張された芸術概念と、日本の戦後民間美術教育運動との接続を図っていくことも美術教育の理念探求として喫緊の取り組みとなる。ポスト近代以後の今日のアートの現場では、様々な個性、一人ひとりの語りが重視される。日本の戦後美術教育においても、子ども達一人ひとりの語り、言葉が重視された。それは、いうならば一つのイデオロギーのもと、同じ型に子どもたちを収めるのではなく、一人ひとりの多様な姿を重視すべきであるという主張である。先に述べたように、今日のアートの現場では、多様な表現スタイルの多様なメッセージを持った作品が提示される。マイノリティーやLGBTQといった社会的に抑圧されてきた人々による表現は、すべての子どもの創造性を重視するという創造主義の今日的な姿を示しているとも考えられる。そしてまた社会問題、政治問題を警鐘する作品に出会うことは、認識主義による美術教育の今日的な可能性と意味合いを呼び起こすものであると言えるのではないだろうか。

そして、日本の戦後において、すべての子どものための希望の原理であった美術教育の出発点を捉え直す時、今日においても、常に子どもと弱者に寄り添い、表現や出会いの場を用意する人々の姿を想起することができる。筆者にとって、それは、レッジョ・エミリア・アプローチ、ティム・ロリンズとK.O.S、ココルーム、せんだいメディアテークの営為であった。これらの活動は、「危機」の意識を明確に持ち、「芸術による教育」を実践している。この意味において、これら「拡張された芸術概念」とその実践は日本の戦後民間美術教育運動とつなげることが可能となる。第二次世界大戦後の美術教育の主張、希望の原理と繋がっているのである。

3 学校教育の更新、アートの構成要素を抽出する

日本の美術教育の最大の特徴は、学校教育、学習指導要領によって、その機会と場が保証されていることである。このことを私たちは積極的に捉え、論じる必要がある。平成29年に告示された学習指導要領が示す通り、今日の予測不能な社会の中で、「主体的・対話的で深い学び」は重要であり、この理念に基づき教育実践の改善と更新が望まれる。この今日の教育の転換期において、美術教育は多くの重要な知見を教育界に示すことができるであろう。それは、今日のアートの展開そのものが、予測不能な社会の実情と、その現在を生きる人々の姿、具体的な解決策、新たなビジョンを示しているからである。

また、日本の学習指導要領では、「遊び」の重要性が明示されている。「遊び」が児童生徒の主体的・対話的な深い学びを牽引し、また次の段階へと発展させることができるのかを具体的に美術教育学の場から示していくことも必要である。そのために、今日のアーティストがどのように創作を行うのか、そのプロセスの本質を掴み取り教育活動に結びつける必要がある。アーティストは、様々なものに出会い、考える。そして表現することに熱中する。そこには生みの苦しみに以上に、「出会い」への驚き、「気づき」の高揚感、制作プロセスの中の

「喜び」がある。それは日本の美術教育、「造形遊び」が示した内容、方法と同一線上に位置していると考えることが可能である。

そこで今後の美術教育学の役割として、実際の教育現場で活用できる「創造」を推進するアクションモデルを示すことも必要となる。千葉大学の神野真吾による『創造のサイクル』は、その有効なモデルである⁽²¹⁾。「感じる」、「深める」、「考える」、「価値づける」「構造化」、そして「アクション」を起こすという創造のサイクルを、神野は、カントの認識論、アレントの政治思想、ヨーゼフ・ボイスの彫刻理論などから抽出し、教育心理学者の縣拓充と共に現代における「造形要素」を学校教育において更新していくことを提案している。現代のアートが持つ社会的課題を認識する力に着目し、そのリテラシーを定義し、身につけるためのアプローチを具体化することを試みるのである。

4 社会の中の美術教育の場を見つける

本稿で論じてきたように、美術教育の現場は学校に収斂されるものではない。学校教育を超えて、社会の中で実践される豊かな美術と教育の現場がある。欧米諸国では、教育・文化・経済が「アート」を中核とする施策によって、産業・社会構造の転換期に対峙し新たな時代を築いている。具体的には、クリエイティブ・シティ（リチャード・フロリダ 2009）等の事例にみるように、アートを中心にすえた行政、経済、教育施策を行い、都市の価値向上を世界各地で図っている。暮沢剛巳＋難波祐子編著『ピエンナーレの現在：美術をめぐるコミュニティの可能性』（2008）は、拡大するアート、美術教育の現場を社会学的なアプローチによって明らかにしている。そしてアメリカの教育学者ヘンリー・ジルーは、多様な価値観が相克しあう多文化社会のなかで自由で公正な生き方を追求する人間像を模索する「ボーダー・ベダゴジー（越境教授学）」を提唱している。

以上、示した研究は、美術教育学の視座から改めて検証すべき今日の多様な社会における創造性、表現と文化、人の成長と変容の現場に関する研究である。今後も社会は大きく変容し、また新たなアートが登場するだろう。今後、美術教育学は、「アートの拡大」を踏まえ、人間学的な美術教育学の知見によって浮上する社会の中の可能性の萌芽、人間の営みがあることを示していかなければならない。それが、美術教育における理念、理論研究の大きな役割ではないだろうか。

V 結論

本稿では、モダンアートの終焉以後の拡大するアートを検討し、美術教育の今日における現場を参照することによって美術教育の理念をどのようにして更新するかを考えてきた。

拡大されたアート、ポスト近代以後のアートの今日的展開は、束縛から解放された多様な声、多文化の現実を私たちに示している。そして「拡張された芸術概念」に基づき、一人ひとりが変容すること、行動することの意義が、アートの文脈から立ち上がっていることを確

認することができた。この拡張された芸術概念から、美術教育学が対象とすべき社会におけるアクション、プロジェクトを今後も見出して行くことが必要となる。そして拡大されたアート、拡張された芸術概念から、今日の「美術する」こと、「アートする」ということの動態、在り方を抽出することによって、美術教育学は、日本の公教育の一教科の問題としてではなく、私たちの社会が孕む問題に対して、広く希求する言葉と教育実践を示すことができるのではないだろうか。そして、公教育における美術教育の質的変換と向上に寄与することができるであろう。

不穏な空気が充満する現在、美術教育の役割は大きなものであると筆者は考えている。社会に対する疑問、個の苦悩、人間の尊厳といった問題も、今後、美術教育学の場において論じていく必要がある。それは、希望の原理としての美術教育の今日の在り方を模索し、学校における美術教育の地盤沈下を防ぐためにも必要となる。そしてそれは、改めて社会全体で美術教育の考え方や在り方を共有するために必要となる探求であるとする。

謝辞

本稿執筆のきっかけをつくってくださったのは和歌山大学・永守基樹教授です。永守教授より多大なご教授を賜りました。また、本稿の思考のほとんどが、恩師・柴田和豊先生の鋭い思索、論考との出会いがその出発点となっています。お二人に心より感謝申し上げます。

注

- (1) 例えば、レアンドロ・エルリッヒ『建物』2004、など。同作品は、2017年11月～2018年4月まで東京の森美術館で展示され大反響を起こした。
- (2) 例えば、チームラボ『福岡城 チームラボ 城跡の光の祭』2017, Digital Interactive Installation, Sound: Hideaki Takahashiなど。
- (3) アーサー・C・ダントー『芸術の終焉のあと: 現代芸術と歴史の境界』三元社, 2017年。
- (4) 同上, 122頁。
- (5) 同上, 39頁。
- (6) ハイナー・シュタツヘルハウス『評伝 ヨーゼフ・ボイス』美術出版社, 1994年, 参照。
- (7) <http://www.momaps1.org> 参照。
- (8) 現在、日本各地で開催されるビエンナーレ、トリエンナーレにおいても、出展参加するアーティストが開催される土地に長期滞在し、その土地に根ざした活動、市民との共同制作を多数行っている。
- (9) 今日の日本における対話型鑑賞の発展は、ニューヨーク近代美術館におけるギャラリートークが出发点となっていること指摘しておきたい。ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ (VTS) などの理論整備が美術館を基点に進められ、多様なアートに向き合

- い、語り合うことを通じて、多角的に物事を捉え、クリティカルに思考する力の養成が進められている。
- (10) パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門 アートが社会と深く関わるための10のポイント』フィルムアート社，2015年，参照。
- (11) 佐藤 学（監修），ワタリウム美術館（編集）『驚くべき学びの世界—レッジョ・エミリアの幼児教育』東京カレンダー，2013年，参照。
- (12) ニコラス ペーリー『キッズ・サバイバル—生き残る子供たちの「アートプロジェクト」』フィルムアート社，2001年，参照。
- (13) リゾームとは、ドゥルーズおよびガタリの共著『千のプラトー』の中の登場する哲学用語で、西洋の形而上学はある絶対的な一つのものから展開していくツリーのモデルに対抗して、中心も始まりも終わりもなく、多方に錯綜するノマド的な知のイメージとして提唱されたものである。その狙いは、体系を作り上げそれに組みこまれないものを排除してきた西洋哲学に反抗し発想の転換をさせるところにあったとされる。
- (14) <http://cocoroom.org> 参照。
- (15) <http://www.smt.jp> 参照。
- (16) 柴田和豊 「「芸術による教育」についての覚え書き」『宮崎大学教育学部紀要』芸能，第43号，1978年，参照。
- (17) 新井哲夫「創造美育運動に関する研究(1) -「創造美育運動」とは何か?-」『美術教育学』美術科教育学会，第35号，2014年，参照。
- (18) 柴田和豊 「「創美」研究に向けて」『東京学芸大学紀要』第5部門，第44集，1992年，参照。
- (19) 山本正男『美術教育学への道』玉川大学出版部，1981年，14頁。
- (20) 谷口幹也編著『アートする力を語る 越境する想像力、転換期の美術教育』中川書店，2017年。
- (21) 神野は千葉市を中心に展開されるWi-CANプロジェクトを主導し数多くのアート実践を展開している。『創造のサイクル』の関しては、筆者が主催した科研シンポジウムにて詳しく報告した。詳細は次の通り。神野真吾「転換期と美術教育をどう定義するか」『アートする力を語る 越境する想像力、転換期の美術教育』中川書店，2017年，86頁。

Expansion of Art and Philosophy of Art Education —Update on practical Art Education and its fundamental theory—

Mikiya TANIGUCHI

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities,
Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

This thesis discusses the concept of expanded art in modern times and the renewal of art education. Post-modern art development has shown us the diversity of voices, multicultural reality. In this paper, we focus on "The End of Art" by Arthur C. Danto and "Extended Concept of Art" by Joseph Beuys. And the arguments of Reggio Emilia Approach, Tim Rollins and K.O.S, Coco Room, Sendai Mediatheque are connected with "extended artistic concept" and assertion of Japanese postwar private art educational movement. By paying attention to today's "doing art", art education can show words and educational practices that are widely wished for, not as a matter of a subject of public education in Japan, but for our society .

Keywords : Art, Post-Modern, The End of Art, Postwar Art Education Movement